日刊　県民福井　2008年(平成20年)8月17日(日曜日)

県外児童ら伸び伸び演技

福井の民話 現代的感覚で創作劇

住民と協力、会場沸く

伊自良館

福井市東部の上味見地区で、農村生活などの体験活動をしている関西地区の子どもたちが十六日、同市中手町の伊自良館で、地元に伝わる民話に基づいた創作劇を披露した。子どもたちは地域住民との交流を深めながら、協力し合って劇を成功させた。

同市の特定非営利活動法人（NPO法人）「自然体験共学センター」の事業に、十日から参加している小学五―中学二年生の子どもたち十五人が上演。参加者仲間の子どもたちや地域住民ら計百人が観劇した。

劇は三部構成で、同市神当部町に伝わるいたずらキツネの民話「ぎょんどぎつね」や、戦の邪魔をしたキュウリの民話「神当部キュウリ」をモチーフに、子どもたちが現代的な感覚で創作。子どもたちの伸び伸びとした演技に会場は大いに沸いた。

子どもたちは各地区を巡って民話を聞いたり、地元の市民劇団「パパーズ」と交流しながら劇を仕上げてきた。同NPOの辻一憲理事長は「地域住民の協力を得て、仲間と協力しながらよく仕上げてくれた」と話していた。（正津聡）

福井の民話に基づいた創作劇を演じる子ども＝福井市の伊自良館で

廃校を活用した生活体験と演劇創作事業　NPO法人自然体験共学センター

中日新聞　2008年(平成20年)8月17日(日曜日)

児童ら創作劇 温泉客笑いの渦

福井

福井市中手町の伊自良温泉休憩所で十六日、地元の民話を基にした児童らによる創作劇が披露され、湯上がりの客に笑いを巻き起こした。

児童たちは廃校になった旧上味見小学校を拠点にしたキャンプに参加している。関西方の十歳から十三歳までの十五人で、学習の総まとめとして演劇に挑戦した。

児童らは五人一組で民話の舞台である神当部町をマウンテンバイクで巡り、住民に取材。途中、地元で活躍する劇団「パパーズ」との交流を通し、民話の続きとして十五分ほどのコメディーに仕上げた。

劇に参加した京都在住の堀田静音さん(9)は「見に来る温泉客の人に笑顔になってほしかった。自分も楽しかった」と満足に話した。劇を見た帰省中の宮崎幸雄さん(四五)は「おもしろかった。自分たちで地域の人にインタビューして劇をつくったのがすごくいいと思った」と感心していた。（西本円）

民話「きゅうり」を基にした劇を披露する児童たち＝福井市中手町の伊自良温泉休憩所で

中日新聞
発行所 中日新聞社
名古屋市中区三の丸一丁目6番1号
〒460-8511　電話 052(201)8811

朝日新聞　2008年(平成20年)8月17日　日曜日

2008年(平成20年)
8月17日
日曜日

国際 4
新防災力 5
囲碁・将棋 5
経済 6
読書 8～11
金融情報 12
スポーツ 13～21
声・主張 23
小説 23 29
地域 26 27　生活 28
BSデジタル・ラジオ 25
be 走る「副署長」船越さん
◆緑beは休みました

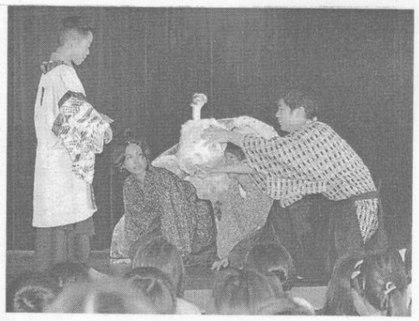
朝日新聞大阪本社　発行所：〒530-8211 大阪市北区中之島3-2-4
電話：06-6231-0131　www.asahi.com

熱演 子ども一座

福井

県内外から小中生15人 創作劇にお年寄り拍手

福井市内のNPOの主催で旧美山町の廃校となった小学校に寝泊まりしながら毎年、野外生活や農業体験をしている県内外の小中学生たちが、今夏、美山に伝わる民話を基に劇を創作した。16日、福井市中手町の温泉施設・伊自良館で「伊自良劇場」と題して、集まったお年寄りら約120人に披露した。



自分たちで考えた創作劇を披露する子どもたち＝福井市中手町

子どもたちは大阪や京都、兵庫などの小学5年～中学2年の男女15人。NPO法人「自然体験共学センター」のプログラムで今年は17日までの8日間、集団生活を送る。旧美山町に高齢女性らによる「ババーズ」などの地元劇団があることに触発され、今年は交流や地元理解を目的に創作劇をすることになった。

この地域にはキュウリのツルに絡まって落馬した殿様の話やいたずらキツネの話が伝わる。子どもらは3班にわかれ、それぞれの続編を創作。殿様はキュウリが好きになり食べ過ぎて栄養不足に、キツネは貴物にして懲らしめられた。創作部分を付け足して披露すると、会場には笑いや拍手が広がった。

滋賀県野洲市から参加した中学1年の辻井今宵さん(12)は「みんなで話し合ってできた作品だから満足です」。見ていた大森はるをさん(89)は「地元の話をよく調べていて、おもしろかった」と話した。

廃校を活用した生活体験と演劇創作事業　NPO法人自然体験共学センター

福井新聞　2008年(平成20年)8月19日(火曜日)

盆踊りの輪 地区に復活

20年ぶり 上味見

100人 山里に活気

ちょうちん、太鼓彩り

福井市美山地区の南東部にある旧美山町上味見地区で、伊自良温泉夏祭りが十六日夜、同市中手町の伊自良館前で行われた。過疎化で中止されていた盆踊りが約二十年ぶりに復活。県外の児童生徒らも多数参加し、百人以上の踊りの輪が山里の夜を活気づかせた。

夏祭りは、同館の指定管理者制度導入に伴い、運営団体として発足した地元住民グループ「伊自良の里振興協会」が、今年から始めた春祭りや秋に予定している祭りなどの一環として主催。廃校となった旧上味見小を拠点に活動するNPO自然体験共学センターのキャンプに参加している京都や大阪、滋賀、兵庫などの児童生徒約七十人も輪に加わった。

約二十年間、旧上味見小の倉庫に保管されていたちょうちん約五十個を会場に並べ、若者の太鼓演奏で幕開け。地元の宮本利子さん(七七)＝味見河内町＝と谷口美智江さん(六五)＝神当部町＝が浴衣姿で踊りの手本となり、「イッチョライ節」「美山音頭」を舞い踊った。最後は味見河内町に伝わる「チョイヤサ」を水口一雄さん(八〇)の音頭と、宮本さんの合いの手で踊り、締めくくった。

宮本さんは「若いころはお盆に踊るのが楽しみで、夜通し踊った。若返ったみたいでうきうきした」。谷口さんも「子どもが一生懸命に踊っていてうれしかった」と笑顔。伊自良の里振興協会の宮下一夫理事長(七七)＝神当部町＝は「久しぶりに盆踊りの音と子どもたちの声が聞こえ、本当にうれしい。続けていきたい」と話していた。

内寛さん(六八)＝西方二丁目＝は「譜面がない上に言葉の意味が難しくて苦労した。伝統を守ることに貢献できてよかった」と充実感に浸っていた。

同奉賛会の浜与志隆会長(八三)は「盆踊りを復活させて昔の盛況ぶりを取り戻したかった。祭りを通じて、人を愛し、郷土を愛する心を広めていきたい」と話していた。

約20年ぶりに復活した盆踊りを楽しむ参加者＝16日夕、福井市中手町の伊自良館前

6.2　作成・使用台本

①きっこりんチーム

ＳＥ　（ハッピー）

たぬき１　「おいおいきつね　人間に捕まえられるなんて、しょばいやつなんだ」

たぬき２　「そーだそーだ」

きつね　「・・・・」

たぬき１　「おいきつねだまっているんじゃない」

たぬき２　「そーだそーだ」

きつね　「だって・・・」

たぬき１　「いいわけするんじゃない！！」

たぬき２　「そーだそーだ」

彦太郎　「やめろ！　そのきつねをいじめるな！」

たぬき１　「ウワー！」

たぬき２　「そーだそーだ」

きつね　「危ないところを助けていただき、ありがとうございま・・・・」

彦太郎
きつね　「あ！？もしかして」

きつね　「あのときの・・・・」

彦太郎　「あのときのキツネ？」

きつね　「あのときは、あぶらあげをとってすいませんでした。」

彦太郎　「あれおいしかった？」
きつね　「うまかった！」

彦太郎　「まじうまかったよね～」

きつね　「そうだよね～口に入れたときの香ばしさ、たまんないよね～」

彦太郎　「じゃあ　これよりおいしいあぶらあげをさがしに行こう！」

たぬき１　たぬき２　背後にこっそり立つ　二人のようすをうかがう

きつね　「おー！」

たぬき１　たぬき２　二人をじっと見つめる

彦太郎　「いっしょにいきたいの？」

たぬき　「うん」

彦・きつね・たぬき　「じゃぁ出発～！」

ナレーター　「こうして、でんせつのあぶらあげを求めて、４人はたびだったのであった」

たぬき１　「パンパンパン♪・・・・」

全員で「森のくまさん」合唱　舞台上をまわる

パンダ　「パンダだよ～。」

きつね　「ねぇねぇパンダさん、おいしいあぶらあげしらない？」

パンダ　「しりません」

彦太郎　「っていうか　ここって中国～～？」（ひょえ～）

ＳＥ　（銅鑼）ごぉ～～～ん

パンダ　「そうだけど」

きつね　「北京オリンピック行こうぜ」

彦太郎　「なんでやねん！」

たぬき　「パンダさん　伝説のあぶらあげしらない？」

パンダ　「そうだそうだ、伝説のあぶらあげかは知らないけど、京都のふしみにあるよ」

彦太郎　「京都にいこー！　パンダさんありがとう」

ナレーター　「こうして四人は京都に行ったのであります。」

全員　歩こう歩こう（トトロ主題歌）歌う

ナレーター　「こうして京都についた四人は・・・」

彦太郎　「京都についたー！」

たぬき２　「そーだそーだ」
ＳＥ　（うぐいす）ホーホケキョ
きつね　「私の仲間がいる～」

たぬき１　「ていうか、伝説のあぶらあげってどこにあるの？」

全員　あたりを見回し　それらしい物をさがす

彦太郎　「あそこでなにかうってる～！」

たぬき１　「すいませーん」
ＳＥ　（チャルメラ）プ～パ～
店の人　「へい、らっしゃい！」

きつね　「伝説のあぶらあげってしりませんか？」

店の人　「しらない」

たぬき１　「本当にしらない？」

店の人　「実は知ってる」

全員　「どっちやねん！！」

店の人　「ごめんごめん
伝説のあぶらあげなら、だれかが買っていったよ。
たしか、福井の神当部ってところからきたらしいよ」

彦太郎　「ありがとうございます
神当部に行こう！！」

ＳＥ　（ワープ）ヒューン　どっカーン！

彦太郎　「神当部に着いた！」

きつね　「あそこの人じゃない？」
たぬき１　「あの、ちょっと、まって」
きつね　「なに？」
たぬき１　「あの一さっきから僕のポケットになにか入ってるんだけど」
彦太郎　「なに？」
きつね　「っていうか、そって、伝説のあぶらあげじゃん！」
全員　ポーズ
ナレーター　「ナンテコッタイ♪」

ＳＥ　エンディング

②クロサギチーム　『きゅうり　リターンズ』

ナレーター１　「あらすじ」
ナレーター２　「初代の殿様は、としになり、病気にかかり、死んでしまいました。
そして息子が後をつぎました。殿になった息子は、神当部に城をつくりました。
殿は家来に言いました。」

殿　「神当部の住民はどのように暮らしているのか、見に行って来い」

家来全員　「はい、わかりました」
ＳＥ　セミの声
ナレーター２　「家来は城下町に行きました。
しかし、家来は殿の命令に背き、隣の町に遊びに行きました。」

家来Ｃ　「殿の命令にふりまわされるのは、もうこりごりなんだよな～」

家来Ａ　「だよね～！　うちもそう思ってた～！だってさ～殿ってさ～わがままだし～」

家来Ｂはうなづくだけ

ナレーター２　「と、三人が八百屋に差しかかったとき」

家来Ｂ　「・・・・あ　・・・・きゅうりだ！！」

家来Ｃ　「えっ！まじで！　俺すげぇきゅうり好きなんですけど～！」

家来Ａ　「これ城にもって帰らない？」

家来Ｂ　「それいいね！」

ナレーター２　「三人はきゅうりを城に持って帰りました。三人が扉をあけたその瞬間！」
ＳＥ　どっカーン

殿　「なにをしておったのだ！！待ちくたびれたぞ！
ん？　その袋はなんだ！見せてみろ！」
家来Ｂ　「こっこれは」
殿　「なんだといっているのだ！早くみせろ！」
ナレーター　「三人はしぶしぶ殿にきゅうりの入った袋をわたしました。
殿はふくろの中を見て」
殿　「なんだこれは？」（中身・殿のカツラ）
殿　「これは・・・わしのじゃ」かぶる
家来爆笑　殿と目が合い　だまる

殿　「これはなんじゃ？」きゅうりを手に取りかじる
ＳＥ　パァァァァァァァァ！
殿　「う、うまい！これは何という野菜だ！」

家来Ｂ　「きゅうりです」

家来Ｃ　「ちなみに、きゅうりには神様が宿っているとかいないとか。」

殿　「そんなことはどうでもよい！畑で作ってこい！」

家来Ａ　「でも、この村ではきゅうりをつくることを禁止されています。」

殿　「だまれ！　われに逆らう者は、ばつを与えるぞ！」

家来Ｃ　「で、ですが・・・」

殿　「だまれ！だまれといったらだまるんだ！はよつくってまいれ！」

家来全員　「はっはい・・・」

ナレーター２　「三人はきゅうりをいっぱいつくりました。
そのきゅうりを殿が食べるというくりかえしでした。
でも殿はきゅうりしか食べないので栄養が不足して病気になってしまいました。
それでも殿はきゅうりを食べるので、どんどんやつれていきました。そしてとうとう家来は」

家来Ａ　「かんびょうばっかりやってられっかよ！もうしらねえよ！」

家来Ｂ　「そうだよ！きゅうりばっか食べやがって！！もったいねぇんだよ！」

家来Ｃ　「やってらんねぇ！こんな城でていってやる！」

ナレーター　「そして、殿が寝ている間に家来達は城を出て行き、

とうとう殿は一人さびしく天に昇っていきました。最後の殿様の遺言は・・・」

殿　「さよなら、伊自良温泉」
ナレーター　「その後、家来の一人が村人にこういいました。」
家来Ｃ　「お前らも、きゅうりばっか食べてると殿みたいになるぞ！」

ナレーター　「その言葉が、村人達を怖がらせ囲碁、神当部では二度ときゅうりは作られませんでした」

③パァイナポーチーム『ぎょんどぎつね　再びばかしたばかぎつね』

ナレーター　「昔、むかしある所に、彦太郎という子がお使いにいっていたら
きつねに騙されました。腹が立った彦太郎は、きつねを木にくくりつけました。
きつねが、『　もうしません　』といったので、彦太郎は逃がしたのですが、
となりまちのいとこの彦次郎のところにきつねがやってきました。」

彦太郎　「あーあ　畑仕事で疲れたなぁ・・・水でも飲もうか。」

きつね　「へへへ　あいつは彦太郎のいとこか、ちょっくらこらしめてやろうか」

きつね、じゃぐちに細工をする
彦太郎、手を洗う
彦太郎　「あ、あれ、水がとまらない」
「・・・・・・・もしかして、これは彦太郎をだましたきつね？」

きつね　「ばっばれた？」

彦太郎　「そうだ！彦太郎に知らせに行こう！」

きつね　「それなら、彦次郎にばけて、先回りして、彦太郎をだまそうじゃないか」
ＳＥ　銅鑼　きつね変身
きつね　「よーし、うまくばけれたぞ」

ナレーター　「次の日。きつねは彦次郎にばけて、彦太郎の家に向かいました。」

きつね（彦次郎）「おーい、彦太郎～！」

彦太郎　「なに？どーした？」

きつね（彦次）「遊びに来たよ」

彦太郎　「あーいーよー、何する？」

きつね（彦次）「木登りしよう！」
やや嫌がる彦太郎をひっぱり　連れ出す
ナレーター　「さて、彦次郎に化けたきつねは彦太郎を木登りに呼んでいったいなにをするのでしょうか？いっぽう本物の彦次郎はというと、彦太郎に知らせるために、いそいで彦太郎の家に向かっています。」

彦次郎　「早く行かないと、でも久しぶりだから、この赤かぶらをお土産にしよう」

きつね（彦次）「さぁ、やっとついたね。この木で遊ぼうか。

彦太郎から登ってよ！」

きつね（彦次）ロープを取り出し　「　へっへっへ　」

彦太郎　「ん？足が動かない。はっ！彦次郎何してる！」
ＳＥ　銅鑼　きつねに戻る
彦太郎　「お、お前いつぞやのきつねか？」
きつね　「そうだ、うらはあの時のきつねだよ。お前に仕返しがしたくて、こんな事をしたんだよ！」
彦太郎　「もう悪い事はしないっていったじゃないか！」
彦次郎　息を切らせながら
「はぁ、はぁ、あぁよかったやっとついた。　彦太郎お土産―！
ど、どしたん！？」

きつね　「ちっ　もうきたのか」

彦太郎　「どうした」
彦次郎　「うらもこいつに騙されたって報告にきたんだよ」
彦太郎　「お前、違うところでも悪さしてたんだな」
きつね　「そうだけど悪い？」
彦太郎　「こんどこそは、ちゃんとおしおきをして懲らしめないと　何か無いかな？」
彦次郎　「それなら、お土産の赤かぶらがあるけど、どう？」
彦太郎　「それだったら、赤かぶらと一緒にきつねも漬物につけてしまえ！」
きつね　「ひーーーーもう本当にしないからたすけてぇ～～～～～！！」

ナレーター　「しかし、彦太郎と彦次郎はきつねを丸焼きにして、赤かぶらと一緒に漬物にしてしまいました。その後、彦太郎と彦次郎は幸せに暮らし、むらに悪さをする人はいなくなりました。」

ＥＮＤ

注１　SE：効果音（Sound　Effect）

平成 20 年度文部科学省委託事業
青少年体験活動総合プラン
青少年の課題に対応した体験活動推進プロジェクト

廃校を活用した生活体験と演劇創作事業
報　告　書

特定非営利活動法人自然体験共学センター
〒910-0005　福井県福井市大手２－１６－３７
ＴＥＬ：　０７７６－９３－２０１３
ＦＡＸ：　０７７６－９３－２０１２
ＵＲＬ：　http://www.kyougaku.com/
E-MAIL：　info@kyougaku.com